大人によるふりシグナルの提示は 子どものふり行動を促すか？¹

伴 碧² 内山 伊知郎 同志社大学

Do adults' pretense signals promote pretend play behavior in children?

Midori Ban and Ichiro Uchiyama (*Doshisha University*)

Our goal in this study was to examine whether controlled pretense signal presentation by an adult promoted pretend play behavior in toddlers. Seventy-two Japanese toddlers (24 toddlers in the 18-month-old group, 24 toddlers in the 24-month-old group, and 24 toddlers in the 30-month-old group) participated in one of two experimental conditions: signal and signal-less. In the signal condition, the experimenter presented children with pretend play behaviors (eating, drinking, pouring, and wiping) accompanied by a smile, speech including sound effects, and gazing. In the signal-less condition, the experimenter presented only pretend play behavior with a neutral facial expression without speech or gazing. For each child, we coded the number of pretend play behaviors and recorded the number of seconds the toddler engaged in the behavior. Results indicated that 18- and 24-month-old toddlers' pretend play behavior lasted longer in the signal condition than it did in the signal-less condition. However, the 30-month-old toddlers showed no difference in pretend play behaviors between the signal conditions. In sum, adults' pretense signals promoted pretend play behavior only in 18- and 24-month-olds, and not in 30-month-olds.

Key words: pretense signals, toddlers, pretend play behavior.

The Japanese Journal of Psychology

2015, Vol. 86, No. 4, pp. 333–339

J-STAGE Advanced published date: September 15, 2015, doi.org/10.4992/jjpsy.86.14309

ふり遊び (pretend play) は、物 A を物 B の代用品として用いる、または人物 A が人物 B の役割を引き受け行為する、あるいは状況 A があたかも状況 B であるかのごとくみなされて、それらの条件のもとで特定の行為が演示されることをいう (高橋, 1996)。そして、ふり場面で示される具体的な行為 (例: 空のコップに水が入っているかのように飲む行為) を、ふり行動と呼ぶ。子どものふりの発達については現在までにすでに検討がなされている (麻生, 1996; Watson & Fisher, 1977)。例えば Tamis-LeMonda & Bornstein (1994) は、13 ヶ月時と 20 ヶ月時の母子の自由遊び場面の縦

断的な観察を行った。その結果、子どもは 13 ヶ月時に比べて 20 ヶ月時に、遊びのなかでふり行動を 2.5 倍も多く行っていることを示した。このように、1 歳半以降、子どもは遊びのなかでふりを多く行うようになる。さらに、24 ヶ月になると、子どものふり行動は最高潮に達し (Fein, 1981; Nicolich, 1977)、大部分の子どもたちが A を B として扱うような対象の代用が出来るようになる (Fein, 1975)。

このようなふりの出現には、大人からの働きかけが重要であると考えられている (Garvey, 1977; Haight & Miller, 1993; Slade, 1987)。例えば Fiese (1990) は、15 ヶ月から 24 ヶ月までの子どもを対象に、子どもが一人で遊ぶ場面と、子どもと母親が一緒に遊ぶ場面での子どものふり行動について検討を行った。6 分間の各場面の観察の結果、子どもが一人で遊ぶ場面では、子どもはふり行動よりも探索行動を多く行ったが、母親と一緒に遊んだ場面では、子どもは一人で遊ぶ場面よりもふり行動を多く行うことが示されている。この

Correspondence concerning this article should be sent to: Midori Ban, Faculty of Psychology, Doshisha University, Tatara-Miyakodani, Kyotanabe 610-0394, Japan (e-mail: mban@mail.doshisha.ac.jp)

¹ 本研究結果の一部は、日本心理学会第 77 回大会で発表された。

² 本研究の実施にあたり、井上 健太郎氏 (2013 年度同志社大学心理学部卒業生) の多大なご支援をいただきました。記して感謝申し上げます。

結果は、母親が子どもと遊ぶ際に示す何らかの働きかけが、子どものふり行動を促している可能性を示唆するものである。しかし、母親のどのような働きかけが子どものふり行動を促すかまでは明らかとなっていない。

Lillard & Witherington (2004) は、18 ヶ月児とその母親を対象に、母子で食べるふりを行う“ふり条件”と、実際に飲食を行う“現実条件”の 2 条件を用いることで、ふり場面に特有の母親からの働きかけが何であるかについて検討を行った。その結果、母親は現実条件よりもふり条件時に、食べる、飲む、注ぐといった食べることに関する行動や、笑顔、子どもを注視する行動を長く表出したことが示された。そこで、ふり条件時に多く表出された母親の笑顔や注視などが、子どもにふりをしていることを示すためのシグナルであるとして、相手に対して自らがふりをしていることを示すシグナルを“ふりシグナル” (pretense signal) と定義し、母親は笑顔や注視、発話などのふりシグナルを用いて子どものふり行動を促すと考えた (Lillard & Witherington, 2004)。

このようなふりシグナルが子どもに対してどのような影響を及ぼすのかを直接的に検討した研究に、Ma & Lillard (2006) がある。Ma & Lillard (2006) は、24 ヶ月児、30 ヶ月児および 36 ヶ月児を対象に、大人によるふりシグナルの提示が、子どものふりと現実との区別を促すかについて検討した。課題では子どもの正面の画面に 2 人の実験者が現れる動画が提示された。2 人の実験者のうち、1 人は笑顔、効果音というふりシグナルを表出して布がかけられたボウルから食べるふりを行い、もう 1 人の実験者は、それらのふりシグナルを発さずに布がかけられた別のボウルから実際に食べ物を食べた。動画が提示された後、子どもの目の前に実験者が使っていたのと同様の中身の見えない 2 つのボウルが置かれ、母親が“どちらに本物があった?” と子どもに尋ねた。その結果、30 ヶ月児および 36 ヶ月児は本物があったボウルを正しく選択することが出来たが、24 ヶ月児の選択率はチャンスレベルと変わらなかった。この結果から、Ma & Lillard (2006) は、子どもは大人のふりシグナルを利用してふりと現実との区別を行うことが出来るが、その月齢は 30 ヶ月児以降であるとした。

このように Ma & Lillard (2006) の研究から、ボウルに布がかけられていたように、本物が欠如しているという情報が与えられていない場合でも、30 ヶ月児以降になると、ふりシグナルは子どもがふりと現実との区別をすることを促すことが明らかとなった。その一方で、24 ヶ月児は、ふりシグナルがあったにもかかわらず、ふりと現実との区別をすることが出来なかった。これに対し、Lillard & Witherington (2004) で示されたように、18 ヶ月児の母親は、子どもがふ

りと現実とを区別出来ない月齢にもかかわらず、ふりシグナルを表出していた。では、この月齢において、ふりシグナルはどのような働きを有しているのだろうか。母親が 18 ヶ月児に対してふりシグナルを発していたことが、ふりと現実を明確に区別することには役立っていないとしても、ふり行動そのものの出現を促す働きを有していた可能性が挙げられる。

そこで本研究では、18 ヶ月児、24 ヶ月児および 30 ヶ月児を対象に、ふりシグナルを提示することで、子どものふり行動の出現が促されるかについて、ふりシグナルあり条件、なし条件を設定し、ふりシグナルの有無のみを操作することにより、両条件間での子どものふり行動について検討を行った。

方 法

実験参加者および実験計画

実験は、2011 年 6 月から 2013 年 10 月までの期間、実施された。

実験者に慣れず、ラポールが形成されない子どもや、実験室に入室後泣き出してしまったり、母子分離が出来なかったりする子ども、あるいは実験実施前に実験室を駆け回るなど着席出来なかったため、教示の提示が出来なかった子ども 13 名 (18 ヶ月児 4 名、24 ヶ月児 5 名、30 ヶ月児 4 名) を除いた。最終的に、18 ヶ月児 24 名 (男児 14 名、女児 10 名、 $M=80.42$ 週、 $SD=1.66$ 週)、24 ヶ月児 24 名 (男児 10 名、女児 14 名、 $M=108.49$ 週、 $SD=1.60$ 週)、30 ヶ月児 24 名 (男児 10 名、女児 14 名、 $M=133.23$ 週、 $SD=1.72$ 週) とその母親を分析の対象とした。実験は、月齢 (18、24、30 ヶ月) × 条件 (ふりシグナルあり、ふりシグナルなし) の 2 要因の計画とし、ともに参加者間要因であった。各月齢ともに子どもを 12 名ずつ 2 つの条件 (ふりシグナルあり、ふりシグナルなし) にランダムに割り振った。

装置・材料

実験室の中央にテーブル (60 cm × 60 cm × 35 cm) と子ども用の椅子 (28 cm × 28 cm × 30 cm) を配置した。また、実験開始前にテーブルの上に実験の材料となる中身が入っていないことが明確にわかる空の透明なビッチャー、トレイ、紙コップ 2 つと紙皿を配置した。実験室には 2 台のビデオカメラ (HDC-TM25, HDC-TM700, 共に Panasonic 製) が設置されており、1 台のカメラは子どもの行動や表情を詳細に観察するために、子どもが椅子に座ったときの顔の高さに合わせた位置に、もう 1 台のカメラは天井に近い位置に設置され、部屋全体の撮影を行った。2 台のカメラで撮影された映像はマルチ・ビューア (MV-40F, FOR・A 製) によって 1 つの画面に表示されるように設定された。

手続き

実験は、著者の所属する大学の実験室で実施された。市内の保健所に、健診を受診するために来所した母子に対し募集を行った。研究参加者として登録を承諾した子どもが研究の対象月齢となった時点で、電話にて研究参加の依頼を行い、承諾した母子を対象とした。練習効果を避けるため、電話では“大学の研究室にて、子どもと実験者で遊ぶ”ことのみを伝えた。参加者が実験室を訪れたときに初めて、子どもと実験者でふりを行ってもらうことを母親に説明した。実験者は、最初の10分間程度、子どもとラポールをとり、その間に母親から実験参加への同意を得た。子どもが自発的に遊ぶようになり、笑顔が見られるようになった時点で、ラポールを終了した。実験の開始に際して、子どもをテーブルの前の椅子に座らせ、母親は子どもから離れて後ろに座るように求めた。実験者は、テーブルを挟んで子どもと対面になるように着席した。そして、母親に対して研究の手順を説明し、子どもにふりを行うように指示したり、教えたりしないよう教示した。その後“じゃあ、今から一緒に遊ぼう”と子どもに話しかけ、ふりシグナルあり条件、ふりシグナルなし条件のどちらか一方を3分間実施した。

ふりシグナルあり条件 実験者はふり行動のうち1種類を4秒呈示、ふり行動なしで5秒待機を1セットとして、合計20回行った。ふり行動の内容は、“食べる”“飲む”“注ぐ”“拭く”の4つであった。4種類の順序はランダムであったが、すべての種類は5回ずつ提示された。さらに、すべてのふり行動に対して、ふりシグナル（笑顔、効果音を含む発話、子どもを注視）を伴わせた。これらのふりシグナルは、Ma & Lillard (2006)と同様のものを用いた。Ma & Lillard (2006)では、録画された映像を刺激として用いていたため、子どもを注視することをふりシグナルとして含めていなかったが、Lillard & Witherington (2004)では、母親が子どもを注視することがふりシグナルとして示されていた。そのため本研究では、実験者が子どもを注視することをふりシグナルに含めた。

ふりシグナルなし条件 ふりシグナルあり条件におけるふり行動（“食べる”“飲む”“注ぐ”“拭く”）のみを提示した。この時、実験者は中性表情で、子どもを注視せず、また、言葉を発さずに行った。

両条件ともに、3分経過した時点でふり行動の提示を終了した。その後、録画した映像を見て子どもの行動のコーディングを行った。子どもの指標については、3分間に子どもが、食べる、注ぐ、飲む、拭くいずれかのふり行動を示した時間（秒）をLillard & Witherington (2004)同様に符号化した。また、子どもがふり行動を行った回数および1回あたりのふり行動の時間についても符号化を行った。また、実験条件

時における子どもの不安を測る指標として、子どもが笑顔を表出した時間（秒）、母親を注視した時間（秒）をそれぞれ符号化した。それに加え、実験者、実験で使った道具を注視した時間も併せて符号化した。さらに、両条件において、母親の行動が子どもの行動に影響を及ぼしていないかを確認するために、子どもが母親を注視した際の、母親の笑顔表出時間（秒）および母親が子どもを注視した時間（秒）についても符号化を行った。なお、笑顔に関しては、子どもあるいは母親の口角が上がった時間と、笑い声を発したときの時間（秒）を測定した。符号化は全て実験者1名が行った。指標に関して、信頼性の確認のため、心理学を専攻する大学生1名がデータの50%に対して実験者と独立して評価を行い、評価者間の相関を算出した。結果、すべての指標において、評価者間に有意に高い相関（ $r = 0.79$ 以上）が認められたため、十分な信頼性が確認されたといえる。

倫理的配慮

本研究は、同志社大学“人を対象とする研究”倫理基準に基づく審査委員会の承認を得て実施された（承認番号1020）。また、対象が子どもであることから、研究を実施する前に、母親に書面および口頭にて、研究の概要および実験の手続き、子どもの体調に合わせて実験は常に中断可能なこと、個人情報適切に扱い分析の際は匿名化を行うことを説明し、同意を得た。

Figure 1. Mean length of pretend play behavior. Error bars show the SEM.

Note. Asterisk indicates significant difference between the two conditions and dagger indicates significant difference between the ages of months in the signal-less condition.

Table 1
Mean frequency and mean length of pretend play behavior

	18 months				24 months				30 months			
	Signal condition		Signal-less condition		Signal condition		Signal-less condition		Signal condition		Signal-less condition	
	Median	<i>Q</i>	Median	<i>Q</i>	Median	<i>Q</i>	Median	<i>Q</i>	Median	<i>Q</i>	Median	<i>Q</i>
Frequency of pretend play behavior	10.00*	(3.75)	0.00	(1.25)	9.50*	(3.25)	0.00	(0.88)	11.50*	(5.13)	4.50	(7.75)
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
Duration of pretend play behavior bout (sec)	1.35*	(0.32)	0.58	(1.00)	1.92*	(0.86)	0.87	(1.34)	1.22	(6.09)	1.73	(1.26)

Note. Asterisk (*) indicates significant difference of signal condition > signal-less condition by age group.

Table 2
Mean length of smiling, gazing at mother, experimenter, and experimental material (sec)

	18 months				24 months				30 months				Bonferroni
	Signal condition		Signal-less condition		Signal condition		Signal-less condition		Signal condition		Signal-less condition		
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	
Smiling	2.03	(2.32)	2.86	(3.68)	6.59	(6.17)	1.20	(1.66)	13.38	(16.98)	18.05	(14.88)	18, 24 < 30
Gazing at the mother	7.77	(3.88)	8.25	(6.56)	8.51	(7.39)	5.49	(4.88)	8.08	(4.74)	7.98	(7.63)	<i>ns</i>
Gazing at the experimenter	37.01	(12.72)	38.36	(15.65)	32.11	(19.57)	38.04	(13.55)	43.23	(26.74)	30.99	(18.15)	<i>ns</i>
Gazing at experimental material	91.95	(14.72)	90.29	(27.35)	97.61	(27.81)	93.70	(27.05)	78.77	(26.96)	77.56	(18.59)	18, 24 > 30

結 果

月齢および条件における子どもがふり行動を表出した合計時間の平均値(秒)を Figure 1 に示す。月齢(18, 24, 30 ヶ月)と条件(ふりシグナルあり, なし)を参加者間要因とする 2 要因の分散分析を行った。分析の結果, 月齢要因の主効果 ($F(2, 66) = 5.85, p < .01, \eta_p^2 = .15$), 条件要因の主効果 ($F(1, 66) = 13.33, p < .001, \eta_p^2 = .17$) および月齢×条件の交互作用がいずれも有意だった ($F(2, 66) = 3.79, p < .05, \eta_p^2 = .10$)。単純主効果の検定の結果, 18 ヶ月児および 24 ヶ月児において有意なふりシグナルの効果が見られた(順に, $F(1, 66) = 7.00, p < .05, \eta_p^2 = .10$; $F(1, 66) = 13.92, p < .001, \eta_p^2 = .17$)。この結果は, 18 ヶ月児および 24 ヶ月児が, ふりシグナルなし条件よりもふりシグナルあり条件で, ふり行動を長く表出したことを示している。一方, 30 ヶ月児における有意なシグナルの効果は見られなかった。また, ふりシグナルなし条件においてのみ, 月齢要因の単純主効果が有意だった ($F(2, 66) = 9.12, p < .001, \eta_p^2 = .22$)。多重比較を行った結果, 18 ヶ月児および 24 ヶ月児よりも 30 ヶ月児で, ふり行動が長く表出されたことが示された ($ps < .05$)。

次に, ふり行動の回数および 1 回あたりの持続時間(秒)について, Table 1 に示す。ふり行動の回数については分布の正規性が確認出来なかったため, ノンパラメトリック検定を実施した。条件要因を独立変数とした Mann-Whitney の *U* 検定を, 月齢ごとに行った。分析の結果, 18 ヶ月および 24 ヶ月において, 条件要因の主効果が有意であった(順に, Mann-Whitney $U = 15.00, z = -3.36, p < .001, r = .69$; Mann-Whitney $U = 5.00, z = -3.92, p < .001, r = .80$)。また, 30 ヶ月において, 条件要因の主効果に有意な傾向がみられた(Mann-Whitney $U = 41.00, z = -1.77, p < .10, r = .36$)。この結果は, 全ての月齢において, ふりシグナルなし条件よりもふりシグナルあり条件で, ふり行動の頻度が高かったことを示している。

さらに, ふり行動一回あたりの持続時間については, 月齢×条件の交互作用のみが有意だった ($F(2, 66) = 4.55, p < .05, \eta_p^2 = .12$)。単純主効果の検定の結果, 18 ヶ月児および 24 ヶ月児において, 有意なふりシグナルの効果が見られた(順に, $F(1, 66) = 3.86, p < .05, \eta_p^2 = .06$; $F(1, 66) = 7.23, p < .01, \eta_p^2 = .10$)。この結果は, 18 ヶ月児, 24 ヶ月児は, ふりシグナルなし条件よりも, ふりシグナルあり条件で一回あたりのふり行

動が長いことを示している。他方、30ヵ月児における有意なふりシグナルの効果は見られなかった。

Table 2に、実験条件時に不安を感じていたかを示す指標である、子どもが笑顔を表出した時間(秒)、母親を注視した時間(秒)および、3分間で比較的多く示された行動である実験者を注視した時間(秒)、実験で使用した道具を注視した時間(秒)の平均値および標準偏差を示す。笑顔を表出した時間および各注視時間について、月齢(18, 24, 30ヵ月)および条件(ふりシグナルあり, なし)を参加者間要因とする2要因の分散分析を行った。分析の結果、子どもが笑顔を表出した時間において、月齢要因の主効果は有意であったが($F(2, 66) = 13.39, p < .001, \eta_p^2 = .29$)、条件要因の主効果および月齢×条件の交互作用は有意ではなかった。多重比較を行った結果、18ヵ月児および24ヵ月児よりも30ヵ月児で笑顔を長く表出していたことが示された($ps < .001$)。また、母親を注視した時間、および実験者を注視した時間については、月齢要因、条件要因の各主効果および月齢×条件の交互作用のいずれも有意ではなかった。一方、実験で使用した道具を注視した時間は、月齢要因の主効果のみが有意であった($F(2, 66) = 3.35, p < .05, \eta_p^2 = .09$)。多重比較を行った結果、18ヵ月児および24ヵ月児よりも30ヵ月児において、実験で使用した道具を注視する時間が短いことが示された($ps < .05$)。なお、子どもが母親を注視した際に、母親が笑顔を表出した時間(秒)および母親が子どもを注視した時間(秒)については、月齢要因の主効果、条件要因の各主効果および月齢×条件の交互作用のいずれも有意ではなかった。

考 察

本研究の目的は、18ヵ月児、24ヵ月児および30ヵ月児を対象に、ふりシグナルあり条件、なし条件を設定し、ふりシグナルのみの操作を行うことで、大人によるふりシグナルの提示が、子どものふり行動の出現を促すかについて検討を行うことであった。分析の結果、ふり行動は、18ヵ月児および24ヵ月児において、ふりシグナルなし条件よりもふりシグナルあり条件で長く表出された。この結果から、大人によるふりシグナルの提示は、18ヵ月児および24ヵ月児のふり行動の出現を促していることが明らかとなった。Ma & Lillard (2006)では、ふりシグナルは、24ヵ月児以前の子どもがふりか現実かを区別することに影響していなかった。しかし、本研究から、24ヵ月児以前の子どもにおいて、ふりシグナルはふり行動の表出を促すうえで有効であることが示された。また、18ヵ月児および24ヵ月児のふり行動の回数および1回あたりの持続時間も、ふりシグナルなし条件よりも、シグナルあり条件で大きいことが示された。他方で、30ヵ

月児はふりシグナルなし条件よりも、ふりシグナルあり条件においてふり行動の回数は多かったものの、1回あたりの持続時間は、条件間で変わらなかった。そのため、30ヵ月児は、ふりシグナルの条件間で、ふり行動の表出時間に差が見られなかった可能性が示唆される。さらに、30ヵ月児は、18ヵ月児および24ヵ月児よりも、実験で使用した道具を注視した時間が短かった。これは、30ヵ月児になると、実験で使用した道具に対して注意を払わなくても、ふり行動が出来るようになることを示していると考えられる。

これらの結果から、子どものふりには、ふりと現実との区別は出来ないが、大人からのふりシグナルによって、子ども自身のふり行動が促される段階(18ヵ月から24ヵ月)と、子ども自身のふり行動の表出には左右されないが、ふりシグナルによって他者の行動がふりか現実かの区別が促される段階(30ヵ月以降)の2つの段階があることが示唆される。したがって、Lillard & Witherington (2004) および本研究の結果を併せて考えると、18ヵ月児に対して母親がふりシグナルを表出することは、子どものふり行動を促す働きを有していた可能性が考えられる。しかし、一口にふりシグナルと言っても多様であり、子どものふり行動を引き出そうとして表出される訴求性を持ったふりシグナルもあれば、訴求性を持たないふりシグナルもまた考えられる。Lillard & Witherington (2004) および本研究では、訴求性の有無を区別していなかったため、今後、検討していく必要がある。

では、ふりシグナルは、なぜ18ヵ月児および24ヵ月児のふり行動を促進したのか。1つの可能性として、ふりシグナルがメタコミュニケーションとして機能していた可能性が考えられる。メタコミュニケーションとは、相互行為のコミュニケーションについての了解であり(Bateson, 1956)、ある行為を二者が遊びとして共有するためには、両者がその行為の意味をサインにしたがって“これは遊びだ”と相互に読み取れなくてはならない(中野, 1996)。したがって、ふり行動のみを提示したふりシグナルなし条件では、18ヵ月児および24ヵ月児は、遊びのメッセージを読み取ることが困難であったことが考えられる。しかしながら、ふりシグナルを伴わせることでメッセージを読み取り、遊びの枠組みを共有することが出来たため、ふりシグナルあり条件において、18ヵ月児および24ヵ月児のふり行動が促進されたと考えられる。

他方で、30ヵ月児では、ふりシグナルの有無は、子どものふり行動の表出時間に影響しないことが示された。では、30ヵ月児において、ふりシグナルはどのような役割を果たしているのか。先行研究において、ふりシグナルを提示された30ヵ月児は、他者の行動がふりか現実かの判断が出来ることが示されている(Ma & Lillard, 2006)。つまり、30ヵ月児において、

ふりシグナルは子どものふり行動を促進するものとして用いられるのではなく、他者の行動がふりか現実かを区別する判断材料として用いられていることが示唆される。30 ヶ月という年齢は、母子のふり遊びから、同年代の仲間との“ごっこ遊び”(group pretend play または social or collaborative pretend play)に移行する時期である。ごっこ遊びが始まる幼児期にかけて、子どもは自ら周囲に様々な働きかけを行うなかで、仲間との相互作用を開始する(松井・無藤・門山, 2001)。したがって、30 ヶ月以降、子どもは仲間とコミュニケーションを取るために、相手の状態を理解したうえで、相手に応じて自らの行動を調整するようになる(木下, 2002)。本研究において30 ヶ月児は、ふりシグナルなし条件でふりシグナルあり条件同様に高い頻度のふり行動を示した。この結果は、30 ヶ月児になると笑顔や言葉などのふりシグナルがなくても、他者のふり行動のみから、ふりであるという状況を理解したうえで、ふりの状況に合った行動を取ることが出来るようになるという、子どもの社会性の発達を示すものだと考える。

なお、ふりシグナルあり条件よりも、ふりシグナルなし条件で18 ヶ月児と24 ヶ月児のふり行動の表出時間が短かったという本研究の結果は、ふりシグナルあり条件において、ふりシグナルが子どものふり行動を促したという解釈と、ふりシグナルなし条件が不自然な状況であったことや、子どもが不安になったことにより、ふり行動が抑制されたという解釈の両方が成り立つ。ただし、子どもの笑顔、母親への注視という子どもの不安と関連する2つの指標に、ふりシグナルあり、なしの条件間で差は見られなかった。つまり、ふりシグナルなし条件で子どもの不安が高かったことを裏付けるデータは示されなかった。しかし、その一方で、本研究のふりシグナルなし条件は、still-face 実験(Adamson & Frick, 2003)と類似しているため、不自然な状況を作り出したことにより、子どもの行動が抑制された可能性を否定出来ない。そのため、今後、実験の文脈を工夫し、ふりシグナルなし条件が不自然ではない状況で実験を行い、その場合でも本研究と同じように、ふりシグナルあり条件で子どものふり行動が多くなるかについて検討を行う必要がある。

また、本研究で対象とした乳幼児期の子どものは、大人のふり行動の模倣を行うことが示唆されている(Rakoczy, Tomasello, & Striano, 2005; Striano, Tomasello, & Rochat, 2001)。先行研究である Lillard & Witherington (2004) は、子どもが示した大人のふり行動の模倣についても、ふり行動としていた。したがって本研究では、先行研究同様に、大人の模倣であるふり行動であっても、広義にふりとして捉えた。しかし、Huttenlocher & Higgins (1978) は、ふりとは大人とは異なる形のふり行動を行った場合を指すという、より狭義の定義づ

けをしている。実際、3歳以降になると、大人のふり行動の模倣を通じて、子ども自らが、大人のふり行動とは異なるふりを生み出すことが出来るようになる(Striano et al., 2001)。そのため、3歳以降の子どものふりについては、大人の模倣的なふりか、子ども自らが生み出したふりかを区別した検討が望まれる。

引用文献

- Adamson, L. B., & Frick, J. E. (2003). The still face: A history of a shared experimental paradigm. *Infancy*, 4, 451-473.
- 麻生 武 (1996). ファンタジーと現実 田島 信元・無藤 隆 (編) 認識と文化 4 金子書房 pp. 60-93. (Asao, T.)
- Bateson, G. (1956). The message "This is play". In B. Schaffner (Ed.), *Group processes: Transactions of the second conference*. New York: Josiah Macy Jr. Foundation. pp. 145-242.
- Fein, G. G. (1975). A transformational analysis of pretending. *Developmental Psychology*, 11, 291-296.
- Fein, G. G. (1981). Pretend play in childhood: An integrative review. *Child Development*, 52, 1095-1118.
- Fiese, B. H. (1990). Playful relationships: A contextual analysis of mother-toddler interaction and symbolic play. *Child Development*, 61, 1648-1656.
- Garvey, C. (1977). *Play*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
(ガーヴェイ, C. 高橋 たまき (訳) (1980). ごっこの構造——子どもの遊びの世界——サイエンス社)
- Haight, W. L., & Miller, P. J. (1993). *Pretending at home: Early development in a sociocultural context*. Albany, NY: State University of New York Press.
- Huttenlocher, J., & Higgins, E. T. (1978). Issues in the study of symbolic development. In W. A. Collins (Ed.), *Minnesota Symposia on Child Psychology*. Vol. 11. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates. pp. 98-140.
- 木下 孝司 (2002). ミスコミュニケーション状況における2歳児の他者視点に関する理解 神戸大学発達科学部研究紀要, 10, 25-34.
(Kinoshita, T. (2002). Two-year-olds' understanding of other's perspective in miscommunication situation. *Bulletin of the Faculty of Human Development, Kobe University*, 10, 25-34.)
- Lillard, A. S., & Witherington, D. C. (2004). Mother's behavior modifications during pretense and their possible signal value for toddlers. *Developmental Psychology*, 40, 95-113.
- Ma, L., & Lillard, A. S. (2006). Where is the real cheese? Young children's ability to discriminate between real and pretend acts. *Child Development*, 77, 1762-1777.
- 松井 愛奈・無藤 隆・門山 睦 (2001). 幼児の仲間との相互作用のきっかけ——幼稚園における自由遊び場面の検討—— 発達心理学研究, 12, 195-

205.
(Matsui, M., Muto, T., & Kadoyama, M. (2001). The initiation of peer interaction: Analysis of preschoolers' free play. *Japanese Journal of Developmental Psychology*, **12**, 195–205.)
- 中野 茂 (1996). 遊び研究の潮流——遊びの行動主義から遊び心へ—— 高橋 たまき・中沢 和子・森上 史郎 (編) 遊びの発達学 基礎編 培風館 pp. 21–60.
(Nakano, S.)
- Nicolich, L. M. (1977). Beyond sensorimotor intelligence: Assessment of symbolic maturity through analysis of pretend play. *Merrill-Palmer Quarterly*, **23**, 89–99.
- Rakoczy, H., Tomasello, M., & Striano, T. (2005). On tools and toys: How children learn to act on and pretend with “virgin objects”. *Developmental Science*, **8**, 57–73.
- 高橋 たまき (1996). 遊びの再考 高橋 たまき・中沢 和子・森上 史郎 (編) 遊びの発達学 基礎編 培風館 pp. 1–20.
(Takahashi, T.)
- Tamis-LeMonda, C. S., & Bornstein, M. H. (1994). Specificity in mother-toddler language-play relations across the second year. *Developmental Psychology*, **30**, 283–292.
- Slade, A. (1987). Quality of attachment and early symbolic play. *Developmental Psychology*, **23**, 78–85.
- Striano, T., Tomasello, M., & Rochat, P. (2001). Social and object support for early symbolic play. *Developmental Science*, **4**, 442–455.
- Watson, M. W., & Fisher, K. W. (1977). A developmental sequence of agent use in late infancy. *Child Development*, **48**, 828–836.

—— 2014. 7. 6 受稿, 2015. 3. 14 受理 ——